

アジアパラリンピック報告

平成 26 年 10 月 18-24 日

報告、写真：IPC 国際審判員 吉田 寿子



写真上；会場全景

写真右；中国メディアが中国金メダリストを早速取材



アジア大会での日本選手の活躍が、テレビ、新聞で大きく報道され、日本のスポーツ界が沸いた。その2週間後には、アジアパラリンピックが開催されたが、日本での報道の対応はどうだったのだろうか。メダルラッシュに沸く水泳やパラリンピック連続金メダリストを擁する陸上や、テニスはテレビで大きく取り上げられたらしいが、パワーリフティングは日本のメディアには全然登場しなかったようだ。

確かに、パワーリフティングの会場にも、韓国やイラン、UAE、中国などのテレビ局は実況をしていたが、日本のテレビ局はやってこなかった。リハビリの延長とみられていた障がい者スポーツが、純粋にスポーツとして、世界的に認められたことは、非常にうれしいことだが、それに伴い、障がい者スポーツもチャンピオンスポーツとなり、メ



日本選手団、選手10名、監督1名、ヘッドコーチ1名、コーチ2名、国際審判3名でアジアパラに参加した



ダルの数で、その競技が評価される時代に突入した。障がい者パワーリフティング連盟では、強化合宿や海外選手の招へい、海外遠征と様々な選手強化活動をしているものの、まだまだ、メディアをこちら側に向けるだけの力がない。

選手も役員も、一丸となって、それぞれの立場で、2020年の東京パラリンピックでのメダル獲得と、2020年以降の安定的な組織づくり、東京以降に活躍できる選手の育成に力を注がなければならないときを迎えている。

インチョン市では市をあげてパラリンピックを招へいしてくれている。「イ

ンチョン」というと私は、国際空港があるということしか知らなかったが、韓国では、第五位くらいの都市で、アジアオリンピック・パラリンピックを契機に、地下鉄・バスをはじめとする交通網の充実、マンション群やショッピングセンター等が立ち並び、ソウルの隣の大都会に変貌しつつあるようだ。日本でいえば、東京と横浜のような関係といえそうだ。

このアジアパラゲームに出た選手から、アジア地区のリオパラリンピックの代表が選ばれるとあって、中国以外の各国は、この大会を照準に合わせて選手の調子を調整してきたようだ。調整不足の中国は、記録は低いながらも、いくつか金メダルを獲得し、パラリンピックでの大量金メダル獲得への足掛かりをつかんだようだ。

日本からは、アジアパラリンピックの標準記録を突破した10名の選手が出場し、それぞれが全力をかけて試合に挑んだ。また、コーチ陣も、二週間という長期休暇をとり、選手のために遠征してくださった。監督の石田直章氏、ヘッドコーチの中ノ瀬啓作氏、JPC 公認障がい者コーチの篠田健治氏と岡本孝義氏に、そのご尽力に対し、まずは、心からのお礼を申し上げたい。

パワーリフティングの会場は、周りに何もなかったところに、巨大なテント幕がはられ、その中にアップ場、観客席、舞台、様々な用途の部屋が作られてた。おそらく、試合が終われば、壊し、そこに何らかの開発計画があるのだろう。

選手村も、アジア大会後は、一つの町になるようで、幼稚園や、学校、医療施設を中心にマンション群が立ち並んでいる。そのマンションの一室、一室に選手や役員が入ったが、後々販売するので、汚されたり、壊されたりしては大変とばかりに、床も、壁も、養生がほどこされ、部屋には、テーブルも椅子もなく、ドンと、ベッドが鎮座するばかりで、二週間、とても、居心地の悪い思いをすることになった。と、言っても、朝6時に部屋を出て、大会会場に行き、帰ってくるのは夜の8時か9時、時には10時半。クタクタになっているので、部屋がどうのこうのと思う間もなく2週間が過ぎていった。

東京パラリンピックでも、同じようなコンセプトで施設準備がなされるのかもしれない。東京オリンピック・パラリンピックのスローガンは「レガシー」で、東京の町だけではなく、各競技についても、どのような「遺産」をこの東京大会で残せるのか、ということが、一番大きな課題とされている。



選手のプレゼンテーション、右端は西崎選手

日本選手の結果

今回の派遣は、一部のコーチ陣の連盟負担以外は、旅費は無論、ユニフォームに至るまで、日本パラリンピック委員会の援助を受けての参加となっている。

インチョンに到着後は、選手一人につき、コーチを2名ずつ配置して、トレーニングと日頃の選手の癖や力をコーチに知ってもらい、試合に臨んだ。わずかなブレも許されない厳しいルールであるので、コーチ陣は、赤がつくような試技をしている選手には、審判の目になって得心が行くまで、練習を繰り返した。その、厳しい指導の甲斐があり、失格者を出さずに済んだことは、まずは、JPC から派遣していただいた恩返しできた、心の底からホッとした。

メダルを取れたのは、女子45kg級の小林浩美(福岡県)だけであった。アップ不足のまま試技台に上がるというアクシデントのため不本意な62kgという記録しか出せず、がっかりしていたが、リオパラリンピックの標準を突破し、まずは、リオへの関門を通過した。

男子陣では、80kg級の宇城元選手と、88kg級の大堂秀樹選手にメダル獲得の期待がかかっていた。宇城選手は、第一試技から非常に重く、しかも、審判の厳しい判定の前に、これを落としてしまった。どうやら、インチョン入りしてから、微熱が取れないらしく、体調不良が、そのまま試技の不調として現れた。やっとの思いで、第二試技183kgを成功させたが、5位に留まった。リオパラリンピックの標準は突破しているの、がっかりすることはない、今後の記録向上で世界ランキングを上げればよいのだから。

もう一人、メダルのかかった大堂選手は、88kg級で、モンゴルの選手と抜きつ抜かれつの試合展開をした。惜しくも破れて、4位となったが、大健闘の戦いだった。

この3人には、メダルを取りますと、JPCに訴えての、今回の10名派遣であったので、連盟としては、残念な思いがあるが、試合は時の運、悔やむより、今後の選手の活躍をどのように支援していけばよいか、という方向に目を向けなければならないだろう。

次世代を担う選手の育成のために、との目標もあり、今回、8位以内入賞の可能性のあるアジアパラリンピック標準突破選手を7名送り込んだ。

男子49kg級では、ロンドン参加組の三浦浩選手が121kgをマークして8位にはいった。ロンドン以降、練習を重ねてきたが、第二も第三も押しはするが胸でのブレと、スティッキングポイントの僅かな傾きをとられ、厳しい判定になき、赤がついてしまった。リオ標準は突破しているの、あとは、今後の競技会でできるだけランキングを上げることが課題だ。

同クラスに出場した松本崇選手は、大舞台を前に、周囲の期待もあり、通常より練習量を増やしてしまったことが逆効果となり、記録は85kgに留まり9位となった。練習量は、人によって全く異なるので、松本選手には、



女子45kg級、銅メダルを獲得した小林選手(右端)

ウェイトリフティング出身の障がい者公認コーチ篠田選手と三浦選手



ぜひ、自分の体を知り、次の大きな舞台では、ぜひ、100 kg を上げて、パラリンピックの標準記録を突破してもらいたい。

54 kg 級では、西崎選手が6位に入った。スタートの123 kg を獲得するも、自己ベスト、並びに、日本記録となる132 kg は胸での止と傾きを取られ、失敗となってしまった。JOC のアスナビというシステムを使わせていただき、アスリート就職を果たした西崎選手には、11月からは新しい環境で、トレーニングできる道が待っている。今後の活躍に期待を預けたい。

ISID 社のアスリート支援を受け、仕事に、練習に日々

精進を続ける岡田選手だが、4月から体調が思わしくなく、ようやく病気から快復、まだまだ、本調子にまでは届かなかったが、厳しい判定の中、第一、第二試技をきれいに成功させ102 kg をマークして8位を獲得した。

65 kg 級では、コーチ陣の指導で、確実な試技を目指そうと、慎重に103 kg でスタートした城隆志選手が、アジアに挑む。113-123 kg と10 kg 飛ばしに試技をし、すべて、真っ白で試合を終えた。順位は惜しくも9位で入賞を逃したが、厳しい判定の中すべてを成功させたことを自信につなげ、次の試合では、ぜひとも、パラリンピック標準突破を目指してもらいたい。

72 kg 級では、佐野義貴選手が出場する。股関節の手術を受けた佐野選手にとっては、バランスを取って、バーベルを押すことがとても難しい。今年の1月にIPC パワーリフティング代表のエイモス氏を招へいた際に、足に巻くストラップ次第で、パフォーマンスが変わることを知り、佐野選手とともに、所属のパワーハウスで試行錯誤して、ようやく、きれいな試技ができるようになった。134-139 x -141 kg と自己ベスト記録をマークして6位に入った。

80 kg 級の斉藤伸弘選手は、ハンドサイクル、アーチェリーと様々な障がい者スポーツをこなし、パワーリフティングに参戦してからは、まだ、二年目の選手だ。記録は、自己ベストとなる142 kg をマークして8位に入った。

モンゴルの選手と激しい銅メダル争いをした大堂選手と、石田監督



判定については、厳しい、といっても、なかなか、IPF や JPA 所属の皆さんには、理解していただけないかもしれないが、一瞬の胸での止め（こちらは IPF と比べると短いかもしれない）、何よりも、「静止」が大事で、胸でバーが揺れているような場合は、「静止」とは言わず、赤判定となる。特に下肢に障害を持つ選手にとっては、重いバーベルを胸までおろして「止める」ということは、バランスを取るのが難しく、繰り返し、繰り返しの練習で、イメージを体に覚え込ませるほかない。また、傾きについても、おそらく、ビデオ再生では全く分からないほどの微妙なブレ、傾きはすべて赤判定になる。厳しすぎるという、IPF 出身のコーチからは意見が出されるが、パラリンピックの場合は、その判定で、選手の生涯の生き方が決まるほどのお金が動いたり、待遇が決まったりする。それが、ハングリー精神ともなって、下肢に障害を持つ選手の生きる支えになっているという側面がある。そういう、赤、白一つで、選手の人生をも決めかねない判定を下すには、やはり、厳しすぎるという批判を受けても、厳しすぎる判定をすることが、公平につながると私は思う。

次の試合は、1月11日の全日本選手権大会。今回のアジアパラリンピック期間中に IPC に全日本の公認申請を完了させたので、今回、よりも一段階上の記録を選手の皆さんには、狙っていただき、IPC ランキング登録と、リオパラリンピック標準突破を目指していただきたい。

今大会期間中に IPC と JPC が会談があり、IPC から今後の2020年に向けての日本における国際大会招への要請があり、リオ以降、国際招待試合、アジア選手権、ワールドカップの開催が打診された。これについては、今後、IPC と JPC との協議が必要だが、これに伴い、国際クラス分けドクターの養成や IPC 公認国内・国際審判員の養成、大会スタッフの養成なども必要となってくる。今年度は、障害者スポーツの管轄が文科省に移ったばかりだが、来年はスポーツ庁が設立され、こちらがすべてのスポーツ団体を統括するとも聞いている。組織が落ち着くのに、1、2年にかかることを思えば、リオが終わるや否や、東京への準備活動が始まるようだ。

もし、障がい者パワーリフティングにご協力いただける方々がおられたら、ぜひとも、IPC の主催する講習会にご参加いただくことをお願いしたい。



度々のミーティングで審判の判定を統一しようとする IPC 代表



今大会最高重量 290kg に成功したイランの選手

